



(公財) 国際宗教研究所 宗教情報リサーチセンター

# 「ラク便利」 小特集

→他の論文・研究ノート・小特集のバックナンバーは[こちら](#)をご覧ください。

\*印刷してご利用の際は2頁目以降を印刷して下さい。

## 小特集

## 大嘗祭

## はじめに

天皇陛下の即位に伴って行われる皇室行事「大嘗祭」の中核儀式「大嘗宮の儀」が、2019 年 11 月 14 日夕方から翌 15 日未明にかけて、皇居・東御苑に造営された大嘗宮にて行われた。大嘗祭には関連するものを含めると 20 を超える行事がある。また、第 126 代天皇の即位関連儀礼が 12 月初旬に全て終了したことも受け、改めて即位関連諸儀式に対する日本社会の反応についても総括的に述べてみたい。

## 1. 大嘗祭と関連諸儀式

この節では大嘗祭とそれに関連する諸儀式を時系列にそって整理する。なお、本稿の採録期間中には「即位の礼」があり、その中心儀礼となる国事行為「即位礼正殿の儀」(10 月 22 日)と、同じく国事行為「祝賀御列の儀」(11 月 10 日)、皇室行事として即位礼正殿の儀と同日に行われた「即位礼当日賢所大前の儀」と「即位礼当日皇霊殿神殿に奉告の儀」があるが、これらについては国内記事にまとめる。

## (1) 新穀供納式

10 月 15 日、大嘗祭で使用する新米を皇居・東御苑に建設中の大嘗宮に納める新穀供納式が、大嘗宮内にある斎庫で行われた。納められた新米は、儀式の参列者を招く祝宴「大饗の儀」の料理にも使用される。午前 10 時過ぎ、栃木県高根沢町の「悠紀斎田」で収穫された新米を入れた木箱が、古式衣装を着た耕作者の大田主を先頭に、斎庫の前に運ばれた。新米は検分後、掌典により榊でお祓いを受け、十箱が斎庫に納められた。午前 11 時半からは京都府南丹市の「主基斎田」の収穫米も収納された(東京・東京・夕 10/15)。

## (2) 大嘗祭奉告のための儀式

大嘗祭に先立ち、11 月 8 日、天皇陛下は皇居・宮殿で「勅使発遣の儀」に臨まれた。この儀式は大嘗祭を 11 月 14、15 日に行うことを奉告するために伊勢神宮に使者を派遣するものである。古式装束姿の陛下は、伊勢神宮で読み上げる「御祭文」を使者に託した(毎日・東京 11/9)。

伊勢神宮内宮では当日祭として 11 月 14 日、使者が御祭文を奉告する「奉幣の儀」と、新米や季節の野菜など神饌を神前に供える「大御饌の儀」が行われ、祭事の無事と安全が祈られた。祭事は外宮や別宮など 125 社全てで 20 日まで催された(伊勢・津 11/15 ほか)。

## (3) 大嘗宮の儀

2019 年 11 月 14 日午後 6 時半頃、最も格式の高い装束である純白の御祭服を纏った天皇陛下が、大嘗宮の廻立殿から東に設置された悠紀殿に向けてゆっくりと歩き始めた。松明をかざす者、三種の神器・劍璽(劍と曲玉)を運ぶ者、祭服のすそを持つ者、頭上に鳳凰が載った菅笠をさしかける者、草で編んだ「葉薦」を陛下の足元に敷く者とそれを後ろで巻き取る者など、大勢

の侍従らの付き添いととも約80mの廊下を10分かけて歩み、陛下は悠紀殿に入っていった。そしてその直後に白い帳とばりが下ろされ、秘事の「悠紀殿供饌きょうせんの儀」が始められた。非公開のため内部の様子の詳細は明かされていないが、天皇陛下は、采女うねめと呼ばれる女性から渡される米と粟、新穀で造った白酒・黒酒などを供え、五穀豊穰と国家安寧を祈念する御告文おつげぶみを読み上げ、自らも新穀と神酒を口にする直会を行ったとされる。天皇陛下が悠紀殿に入った後、純白の十二単に髪を古来のおすべらかしに結った皇后さまが廊下を進み、隣の「帳殿」で拝礼した。午後9時15分頃、供饌の儀を終えた天皇陛下は悠紀殿を出て、ふたたびゆつくりと廻立殿に戻った。翌15日午前0時半には「主基殿供饌すきでんの儀」がはじまり、同じ所作をくり返したという。大嘗宮の儀は15日午前3時15分頃、全ての儀式が終了した(読売・東京11/15、日経・東京11/15、産経・東京11/16ほか)。

以上が令和に行われた大嘗宮の儀の式次第である。「幽玄 悠久の秘儀」(読売・東京11/15)、「闇の中 秘事粛々」(毎日・東京11/15)といった言葉とともに暗闇に浮かぶ純白の衣を纏った天皇皇后両陛下の写真が記事に添えられ、内陣の最奥、閉じられた帳の向こう側といった神秘的な雰囲気を与えようとする記事構成のものは少なくない。

大嘗宮の儀の後にも行事は続く。11月16日と18日には、大嘗宮の儀の参列者と天皇陛下が酒食をともにする「大饗の儀」が皇居・宮殿の豊明殿で開かれた(朝日・東京11/19)。11月18日の大饗の儀をもって大嘗祭に関する全ての行事が終わり、一連の儀式の終了を奉告する皇室行事「親謁しんえつの儀」が執り行われていくことになる。

#### (4) 親謁の儀

11月22日からの「即位礼及び大嘗祭後神宮に親謁の儀」を前に、19日、宮内庁の儀装馬車が現地に向けて皇居から出発した。馬車は皇室の重要行事だけに使われる「儀装馬車2号」であり、皇居外を走るのは1990年の上皇さまの伊勢神宮参拝以来、29年ぶりとなる(読売・東京・夕11/19)。

11月22日と23日、天皇皇后両陛下は伊勢神宮で即位の礼と大嘗祭の終了を奉告する「即位礼及び大嘗祭後神宮に親謁の儀」に臨まれた。22日、伊勢神宮外宮において黄櫨染御袍を身につけた陛下は儀装馬車に乗り、参道を移動。その後、皇位の証の劔璽をもった侍従らを伴いながら正殿に向かい、玉串を捧げて拝礼した。続いて皇后陛下がおすべらかしに十二単姿で拝礼(読売・東京・夕11/22、毎日・東京・夕11/22)。23日には内宮を参拝し、儀式は終了した(伊勢・津11/24)。

続いて「即位礼及び大嘗祭後神武天皇山陵及び前四代の天皇山陵に親謁の儀」が行われた。天皇皇后両陛下は、11月27日午前に奈良県橿原市の神武天皇陵、同日午後には京都市東山区の孝明天皇陵、翌28日午前にも同市伏見区の明治天皇陵を参拝し、親謁の儀に臨まれた。28日午後には、京都御所で西日本の各界代表者約550人を招いた茶会も催された(京都・京都・夕11/28、産経・東京11/29)。12月3日午前、東京都八王子市の武蔵陵墓地を訪れた天皇皇后両陛下は、昭和天皇と大正天皇の陵に参拝、拝礼した(読売・東京12/4)。

12月4日午前、皇居・宮中三殿で一連の儀式の終了を奉告する「即位礼及び大嘗祭後皇霊殿神殿に親謁の儀」が、午後4時半頃からは皇祖神をまつる賢所で「即位礼及び大嘗祭後賢所御神楽の儀」が行われた。黄櫨染御袍の束帯姿の天皇陛下は、皇位の証の劔璽を携

えて参拝。十二単姿の皇后陛下も続いて拝礼された。参列者の退出後には、一連の儀式が無事終了したことを神々に感謝するために宮内庁楽師が秘曲の神楽歌と舞を演じた（読売・東京 12/5）。これをもって、5 月 1 日の「剣璽等承継の儀」からはじまった即位関連儀式は全て終了した。

## 2. 令和の大嘗祭をめぐる議論を振り返る

令和の大嘗祭のタイムラインを追ってきたが、改めて指摘するまでもなく、大嘗祭は神道的要素が色濃い。そのため大嘗祭に関してはこれまでも様々な議論が交わされてきた。その最たるものが「国はいかなる宗教的活動もしてはならない」とする現憲法の「政教分離の原則」との整合性である。また令和の大嘗祭をめぐるのは、時代に即した儀式の形式、大嘗祭の簡素化と伝統についてもさかんに論じられた。これらの論点については『ラーク便り』81 号小特集①「大嘗祭をめぐる議論」ですでに整理されている。この節では、全ての行事が終わった現時点から、これらの論点を報道から改めて確認していく。

### (1) 「政教分離」をめぐる

戦後の皇室典範からは大嘗祭に関する規定が削除され、大嘗祭は法令上の根拠を失った。このため平成の大嘗祭を行うにあたり、政府は「宗教儀式としての性格を有するが、公的性格がある」として、費用を「宮廷費」（国費）から支出するのが相当であるとの見解を公表している。2019 年の天皇代替わりでも、この前例を踏襲するという方針は早くから定まっていた。

しかし、踏襲された「前例」に問題はなかったのだろうか。例えば、即位礼正殿の儀で使用された高御座<sup>たかみくら</sup>は、天孫降臨の神話を具象化したものといわれる。政府は現行法の解釈で宗教色のない「由緒物」や「調度品」と性格づけているが（東京・東京 10/21）、大阪地裁は 1995 年 3 月、即位の礼・大嘗祭への公費支出差し戻しを求める違憲訴訟において請求自体は退けたものの、高御座は「宗教的な要素を払拭していない」「政教分離規定に違反するのではないかとの疑いを一概に否定できない」としていた。令和の代替わりは天皇逝去に伴うものではなく、2017 年 6 月の皇位継承を実現する退位特例法の成立後も検討する時間はあったといえるが、これらの課題や問題点について、政府が本格的に検討した形跡はみられない（朝日・東京 10/21、11/15）。社会全体としても、政教分離に関する議論は活発とはいえなかった。10 月の即位の礼、11 月の大嘗祭、12 月の主要儀式の終了に合わせて新聞各紙は現憲法との整合性を問う特集記事を掲載しているが（日経・東京 10/18、10/19、東京・東京 11/15、毎日・東京 12/4 ほか）、「平成時と比べると違憲論議は低調」（日経・東京 11/16）であり、「論争起きない『祝賀ムード』」（朝日・東京 11/15）と報じられている。

続いて宗教関係者の動きを見てみよう。宗教関係者による即位の礼や大嘗祭への抗議はいくらかあったものの、キリスト教団体の活動が際立ち、閣僚の靖国神社参拝には「政教分離原則に違反する」と批判を欠かさない仏教や新宗教の関連団体はほぼ沈黙していたと指摘される。この背景には仏教と皇室の深い関係も言及されるが、信徒を含む国民の大部分に好意的に受け入れられている現在の皇室の慶事に水をさすことを躊躇う新宗教、伝統仏教の指導者たちの声があったことも紹介される（朝日・東京 11/13）。

具体的なキリスト教団体の動きとしては、10 月 29、30 日の日本キリスト教改革派教会第 74 回定期大会における即位礼正殿の儀への抗議と大嘗祭への国費支出を反対する声明の発表があ

る (キリスト 11/21)。また 11 月 12 日には、日本キリスト教協議会、日本福音同盟、カトリック正義と平和協議会の代表者による大嘗祭への国費使用を反対する 6,200 人分の署名の提出もあった。ただし、集まった署名は 29 年前の前回に比べると 10 分の 1 に減少しており、主催者側は「平成の時に多数派だった訴えが、今や少数派だと意識せざるを得ない」と話す (朝日・東京 11/13、キリスト 11/21)。また大嘗祭当日の 11 月 14 日には、宗教者や大学教員らの呼びかけで「憲法を逸脱する即位礼正殿の儀と大嘗祭を考える京都集会」(呼びかけ人は日本基督教団牧師の千葉宣義氏) が京都教育文化センター (京都市左京区) で開かれ、約 70 人の参加があった (京都・京都 11/15)。

## (2) 大嘗祭の「伝統」と「変遷」

大嘗祭への公費支出をめぐるはその宗教色の強さから政教分離原則に抵触するとの批判がある。これに対し政府は、皇室の長い伝統を受け継ぐ皇位継承に伴う重要儀式とする立場をとり、憲法上の問題はないとしている。しかし、大嘗祭の「伝統」を紐解けば、違った側面も見えてくる。

大嘗祭は奈良時代以来行われてきた儀式だといわれているが、奈良・平安期には主要施設に床もなく、藁や草などで造られた簡素な建物であったといわれている。また室町時代、応仁の乱が始まる前年の 1466 年に後土御門天皇即位に伴って行われた後、約 220 年の間中断されていた時期がある。再興されたのは 1687 年、江戸時代の東山天皇の即位の際であった。現在の形式が整えられたのは明治期以降であり、天皇神格化を進めるなかで大規模化していった。また、江戸時代までは大嘗祭のための稲穂を収穫する際に「造酒児」と呼ばれる童女が重要な役割を果たしてきたが、現在の大嘗祭にはその姿はない (朝日・東京 11/13、伊勢・津 11/15、日経・東京 11/16 ほか)。すなわち、大嘗祭の形式には長い歴史のなかで絶対というものはなく、時代ごとに姿を変えてきたといえる。大正の大礼使事務官を務めた柳田国男も、莫大な労力と経費を要した大規模な儀式は、本来の「素朴の精神」を理解していないと批判していた (東京・東京 11/15)。

なお、令和の大嘗祭の費用総額は約 24 億 4,300 万円となり、人件費や資材価格の高騰を理由に平成の大嘗祭より約 2 億円増えている (日経・東京 11/16)。大嘗祭に多額の国費が投入されることについては 2018 年の秋篠宮さまの誕生日会見をはじめ、議論を呼んでいた。宮内庁は経費削減のため平成の大嘗祭よりその規模を縮小する方針をとり、悠紀殿、主基殿、廻立殿の主要三殿の屋根は、茅葺きから板葺きに変更され、新穀を調理する膳屋は木造から鉄鋼造のプレハブ工法となった。大嘗宮の儀に招く人数の規模も、前回の 936 人から 675 人に縮小されている (朝日・東京 11/15、読売・東京 11/15)。

## 3. 「祝福ムード」のなかでの即位の礼・大嘗祭

最後に、令和の代替わりを振り返り、いくつかの特徴を指摘してみたい。

令和の代替わりは祝福ムードにあふれていた。その中心にいたのは、皇后雅子さまであった。女性皇族に関する記事の多い週刊誌だけではなく、一般紙も「雅子さま 注がれる熱視線」(朝日・東京 10/28)「令和の一大イベントでのお姿は、国民を魅了」(産経・東京 12/6)としてその様子を伝えている。皇室の歴史に詳しい原武史・放送大学教授 (日本政治思想史) は「療養中の雅子皇后に人々が惹きつけられている可能性は高い」と話す (朝日・東京 10/28)。

雅子さまの「適応障害」の療養は 16 年に及ぶが、12 月 9 日の誕生日に際し宮内庁が明らかにしたところによると、雅子さまの 2019 年のこれまでの活動件数は 162 件で、前年の 99 件から大幅に増加しており（読売・東京 12/10）、各種メディアでもその姿は注目を集めてきた。令和の皇室の順調な船出の背景には、雅子さまの復調があるとの宮内庁関係者の声も紹介される（読売・東京 10/22）。とりわけ、外国からの賓客に流暢な英語で応接する雅子さまの姿は「令和流」と称されるなど [→『ラク便り』83 号 42 頁参照]、雅子さまの復調と活躍の様子に、新時代の到来を重ねるかのような受け取り方は多かったように思われる。

また、令和の代替わりにおいて最も大きく変わったのは「祝福スタイル」との指摘もある（産経・東京 11/12）。昭和天皇の祝賀御列の儀では多くの人が正座をして馬車列を出迎え、平成の際には観覧スペースにカメラを持ち込もうとした人が警察の厳しいチェックを受け、押し問答になったこともあった。令和の祝賀御列の儀では、多くの人がスマートフォンのカメラを車列に向け、写真は次々と SNS に投稿された。2014 年頃には上皇ご夫妻を間近で撮影した写真を載せたツイートが「炎上」したこともあったが、2019 年の代替わり行事では、天皇皇后両陛下を撮影した写真や動画がネット上にあふれている（朝日・東京・夕 11/11、産経・東京 11/12 ほか）。

この他にもネット上で話題になったものがいくつかある。とりわけ注目を集めたのは、神話と天候回復を関連させたものであった。10 月 22 日の東京は朝から激しい雨が降り、午前中に宮中三殿で「即位礼当日賢所大前の儀」や「即位礼当日皇霊殿神殿に奉告の儀」が行われていた時間帯は横から雨が吹き付けるほどだった。しかし、即位礼正殿の儀が行われる 10 分ほど前に突然雨がやみ、晴れ間がのぞくという出来事があった。空には大きな虹までかかった。SNS 上には「天叢雲の剣を使うタイミングで雨」「天照大神を見た」「天皇は神の子孫」といった声があふれた（毎日・東京 11/12、読売・東京 11/3 ほか）。皇室に親しみやすさを覚える国民が多いことはすでに多く指摘されるが、皇室行事をいわばライブ中継し、神話ネタの消費ともいえるような投稿をする人々の態度にも、令和の代替わりの特徴、そして皇室と国民の新しい関係のかたちが見てとれよう。

## おわりに

前回の代替わりの際には、昭和天皇の容体急変を受けた「自粛」の強要、戦争責任の問題、大嘗祭と憲法との整合性をめぐる激しい議論など、社会全体に緊張感が漂っていた。しかし今回は、最も宗教性の強い大嘗祭についても社会全体を巻き込むような議論がされるということはなく、「奉祝一色」とすら報じられる（朝日・東京 11/9）。

総じて見れば、祝賀ムードのなかの晴れやかな代替わりであった。しかしその反面、十分な議論を経ないままの前例踏襲が常態化しており、今後の皇室のあり方に関わる議論は避けられ続けている。

[文責：丹羽宣子]